平成２８年９月１５日
農林水産技術センター　農林センター

豆類の開花期以後の管理について

農業技術情報（第４号）

９月８日大阪管区気象台発表の近畿地方の１か月予報では、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多い見込みです。気温は、１週目は平年並の確率が５０％、２週目は平年並または低い確率ともに４０％、３～４週目は平年並または高い確率がともに４０％となっています。降水量は日本海側で平年並または多い確率ともに４０％、太平洋側で多い確率 50％で、日照時間は平年並または少ない確率がともに４０％となっています。

また、病害虫発生予報第７号（９月）では、ハスモンヨトウとハダニ類が「多」発とされ、注意が呼びかけられています。今後、引き続き、鱗翅目害虫の発生に注意が必要です。また、台風の接近も多くなるため、その対策も重要です。

以下の事項に留意して、豆類の適切な管理を呼びかけてください。

１　大　豆（紫ずきんを含む）

⑴開花期以降莢伸長期～子実肥大期にかけて大量の水を必要とする。この時期に水不足になると、早期の葉の枯れ上がりや、落莢、莢の肥大不足の原因となり、減収を招く。

⑵水管理の目安として簡易土壌水分計を活用（別紙参照）するなどして、かん水時期を判断する。

⑶水不足の場合は、隔うね（１うねか２うねとばして水を通す）でかん水し、滞水による根傷みを避ける。区画の大きな（30a 以上）ほ場では、数日に分けてかん水する。

２　小　豆

⑴現在、開花後期～莢伸長期が混在する時期にあたる。水不足の場合は、明きょを活用してかん水したり、うね間に水を走らせたりするなど、実情に応じて効率的に行う。

⑵小豆の根は通気組織を作ることができないため、地下水位が上がると根傷み等、湿害を受けやすい。ほ場が滞水しないよう、排水口や明きょを点検する。

３　共　通

子実の肥大に伴ってカメムシ類や子実害虫（大豆ではサヤムシガ類、小豆ではアズキノメイガ、マメノメイガなど）の被害が増えてくるので、若莢期から（小豆は開花期から）１０日間隔を目安に２～３回防除する。また、ハスモンヨトウ・オオタバコガなど鱗翅目害虫の発生も散見されるので、ほ場をよく観察し、早期防除に努める。

なお、防除のタイミングが遅れると効果が低下するので、次回の防除薬剤をあらかじめ準備しておくこと。